



那智の滝

極楽往生の靈験あらたか 熊野信仰の参詣路 熊野古道

黄泉の国、常世の国へ通ずる信仰の道

熊野古道は、熊野三山（熊野本宮、熊野新宮、熊野那智）への信仰の参詣路として古代より開けていた道路である。
しかし、最初から参詣路として成り立っていたわけではなく、熊野参詣の始まる以前から村々の中にできていた道を参詣者がたどり継いで通りはじめ、その往来が続けられていくうちに信仰の道として御光を浴び、一段と整備され施設が整っていった。
ことに熊野古道の場合は、通行目的が主として参詣という信仰によるものであったため、信仰にかかわる施設が加わり、その道路の数が多く、それにまつわる説話や伝承も多数残されている。
また、この道を旅した人の紀行文や諸記録も残されており、当時の交通事情や、生活、文化を知るうえで貴重な資料となっている。
この点からも熊野古道の歴史的意義は大きいといえよう。

難行苦行によって極楽往生を祈願

熊野は紀伊半島のほぼ南端に位置し、袋路と山岳に満ちた地形である。また半島を迂回する海路にも障害が多い。このような僻遠の地のためかかつて異国的な靈地としてのイメージを都人に与えたようである。
熊野詣は平安時代から隆盛に向い、院政時代が最高潮であった。
上皇がよく熊野詣をされたので、熊野御幸の名で呼ばれた。熊野御幸は延喜七年（九〇八）宇多上皇の御幸をはじめとし、弘安四年（一一二八）の亀山上皇の御幸まで三十七四年間にわたって行われた。
後白河上皇の御撰による「梁塵抄」といわれている。「梁塵抄」には、「熊野へ参るには、紀路と伊勢路とどれ近しとれ遠し、広大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からじ」とうたわれている。
当時、京都から熊野三山を詣でた場合、往復に一カ月はかかったといわれている。

熊野本宮大社





熊野速玉大社



熊野古道

蟻の熊野詣のメインルートは紀伊路

熊野への道は、紀伊路、大峯路、北山路、十津川路、高野路など数多くの道があるが、上皇、女院、公家・武家たちの参詣をはじめ庶民に至るまで「蟻の熊野詣」といわれるほど参詣者が続いた道は紀伊路である。

紀伊路は、田辺を起点として山間部を通る中辺路と、海辺沿いに新宮に至る大辺路に分かれる。

「伊勢へ七度、熊野へ三度」といわれたほどに人々の念願の地であり、参詣者の多い割には道路状況はあまり良いものではなかった。中辺路ルートは山道であり、全国でも有数の多雨地帯でもあることから、土砂流出や崩壊を防ぐ石畳道が各所に見られる。

石畳は先人の知恵でもあり、参詣者にとって心理的に安定感を与えられるものであった。その後、紀州藩では、元和五年（一六一九）徳川御三家として徳川頼宣が紀州藩主となると、藩政全般にわたって改革準備が進められ和歌山から新宮までの紀伊路に、田丸までの伊勢路を加え、「熊野往還道」として大いに整備した。

参詣の長い道程を支えた九十九王子

熊野古道の道すじに数多くある小さな神社は熊野九十九王子と呼ばれ、古代から中世にかけて、難行苦行の道すがら上皇、女院、庶民の休憩所や宿泊所となったところである。

熊野詣の途中、この王子を巡拝して道中の安全を祈願したとも伝えられる。

九十九は実数ではなく、たくさんあるという意味を表わしている。時代によって数え方が異なるが、現在伝えられている王子跡は、大阪から熊野まで九十五社といわれている。

王子社の中でも、藤代（藤白）切部（切目）稲葉根、滝尻、発心門の五社が位が高いといわれ、五体王子と呼ばれて重んじられていた。



熊野本宮大社

熊野坐神社・証誠殿ともよばれ、須佐之男尊の別名である家津御子神を主神とし、熊野速玉神、熊野夫須美神をはじめとする熊野十二所権現を祀る。

社殿は明治22年の大洪水に際し、幸いにも流失を免れたが、明治24年に現在の場所へ移建された。

熊野速玉大社

その創祀については諸説あるが、熊野速玉神、熊野夫須美神、家津御子神の三柱の神々が神倉山に降臨したと伝えられることから、信仰、崇拝がそのはじめと考えられている。後に社殿を現在の地に移し、次々に諸神を追加し、平安時代には十二社殿並び建つ今日の形式が完成したといわれる。

熊野那智大社

熊野三山参詣の最後に詣でるのがこの熊野那智大社である。

熊野夫須美神を主神とする熊野十二所権現に滝宮を加えた十三所を祀っている。熊野本宮大社、熊野速玉大社が平地にあるのに対し、熊野那智大社は山腹に位置する。那智大滝と周囲の原生林は、信仰の対象とされる条件をよく備えているといえる。



熊野三山は、神仏習合の形態

神は仏教を擁護し、仏は本地でその化現が神となる。熊野三山の信仰は神仏習合の形態をとっている。

熊野本宮、新宮、那智宮は、熊野三山としての結束を固め、本宮の本地は阿弥陀如来に、新宮は薬師如来に、那智宮は観音菩薩に充てられ、神仏習合はますます充実していった。

ふたたび脚光を浴びはじめている熊野古道

この古道は、現在国道三一一号線となっているが、観光、文化経済を支える道として和歌山県の手で改良工事が着々と進められている。山岳地帯を走る新しいトンネル、橋梁は自然との調和に数々の工夫がなされており、歴史的遺産を守るため技術者の文化財に対する真摯な姿が感じられる。また、この国道に沿う市、町、村の古道整備への取り組みも熱心で、歴史を愛する多くの人々の手により、今再び昔の面影を取り戻しつつある。

熊野古道は、先人たちが残してくれた、かけがえない財産であることを実感させてくれる歴史の道です。

